

法苑義林章における教體論

佐藤 成 順

一 法苑義林章の第一章總料簡章には、佛陀の教の本質を論究する「教體論」が説かれている。慈恩は、この書において、印度外教の諸學派から小乗の各部派、さらに中觀派の教體論に關説し最後に唯識派の教體論を明示している。かような佛敎諸學派に關する慈恩の教體觀を通して、その共通した特質を指摘すると、聲 *śabda* もしくは聲・名 *nāma* 句 *pada* 文 *vācīna* の言語要素をいずれの學派の場合にも教體であると見做していることである。この場合の文はハとかナとかの單音、文の結合によつてハナという名が成り、名の組合せによつて句が構成される。聲を以て教體とする見解は、教法は佛陀の説法によつて説かれたものである、というかような素朴な思考に由来するものであろう。慈恩が共通の教體として聲に着眼したのは、そのような素朴な現實的な思考に起因するものと推せられる。慈恩は、かかる素朴な着想に出発点をおきながら言語觀を唯識思想と結びつけ、さらに煩雜な言語説を展開している。すなわち一語一語が個立語である漢字の特性を利用して文字の圖式的な多數の配列組合せを造出している。そして、その煩雜な言語説を體の内容として、特色ある教體論を形式している。

従來、體論はシナ佛敎學の特質である。ここでは、シナの佛家の佛敎研究態度の特質としての體論、という觀點から、その一例とし

て教體論を問題とする。

二 はじめに、教體論の中、唯識派の所説のみに限定して、その大略を紹介しよう。

慈恩は唯識派の教體觀を思想的差異から二系統に差別している。まず、第一の系統は、唯心所變の文義の相を教體とする思想的立場である。慈恩の見解にそいつつ若干補説すると、一切の佛の教説は、聞法者の意識の上に佛説に似て顯現した唯識所變のものである。教の能詮の文も所詮の義も識の所變であり、かかる識所變の文義の相が教體であるという。換言すれば、識所變の文義の相が意識の上に聚集して教體を形成する。つまり教體を自己の心内現象に求め、外界に實在する教體を認めない學説である。

次に、その第二の系統は、如來の識上に生じた文義の相を教體とする學説である。この場合は第一の系統すなわち自己（聞法者）の側に教體を求めるとは異なり、教體を如來（説法者）の心内現象として扱えようとするのである。しかしまた、唯識二十論の「展轉増上力二識成決定」に依據して、如來の識上に生じた文義の相が増上縁となつて聞法者の意識の上にも文義の相が生じ、そこで説法者と聞法者の關係が成立し教に對する理解が生ずると補説している。

以上は、教體論の要點のみを示したに過ぎないが、慈恩はさらに詳細な論説を試みている。彼は、この二様の見解を立論するにあつて、教證として、瑜伽論・二十唯識論・金剛般若經論・十地經論・顯揚聖教論・無性攝大乘論・佛地經論・雜集論・成唯識論等の多數の論書から引用している。

しかしながら、注目すべきは、これらの教體論形成の論據に引用してある引用所説を検討すると、右に挙げた論書からの引用所説の

中には、直接教體を論じることが目的としたものはないことである。また原典に引用所説の前後を検討してみても同様な結果であつた。

慈恩が主として引用しているのは、聲名句文を唯識の見地から解釋した言語説に関する所説である。「唯心所變の文義の相」というごとき唯識的言語觀の所説に着眼し、これを論據として、識所變の文義が教體であると主張しているのである。

ところで、かように體を論究するのは、シナの佛家の共通した傾向である。

三 シナの佛家の間では、すでに南北朝時代から主題の體に関する考察が重要な課題とされていた。すなわち吉藏の大乘玄論に、梁の三大法師所謂成實論師の間に、勝義世俗の二諦の體に關す論議があり、二諦の體を同一のものとするか、異とするか、について當時五種の異説が存した事實が伝えられている。また吉藏自からも、同書において般若と方便を體用の關係において把握し、般若を體、方便を用として體用論を展開している。さらに法報應の三身に體相用の形式を適應せしめて、法身を體、報身を相、化身を用と理解し「體相用故立三身」(大正四五、四六上)とさえいつている。なお大乘玄論は全體が八章よりなつてゐるが、その中、二諦義・一乘義・涅槃義の三章には、「辯體門」の一節があり、二諦・一乘・涅槃の體を考究している。また慧遠の大乘義章においても、この書で扱つてゐる主題の凡そ全てにわたつて、「辯體性」もしくは「辯體相」の一節がある。さらにこの義林章の全篇を概観しても同様な事實を見出し得る。このように體の考察は重要な課題となつてゐる。

しかしながら、ここに見られるように、總體的な教の體を問題としてそれを體系的に組織した教體論は義林章以前の他の論書の中に

は求められない。

また内容の點からも、各學派に共通した教體として、言語要素をとり擧げ、體の内容を言語論的に展開してゆく態度には注目すべきものがある。

聲名句文に關する言語論的關説は、中觀派系統の文獻よりも、むしろ唯識派系統の文獻の中にとくに繁く見出される。慈恩は、多數の唯識派の文獻から言語説を引いているが、彼がここに引用している所説以外にも、解深密經・顯揚論・攝大乘論・十地經論・世親攝大乘論・無性攝大乘論・成唯識論等には、聲名句文の言語要素に關する説述は多い。そして、そこには「唯心所變の文義」というごとき唯識的言語觀が明示されている。また攝大乘論には名言種子の思想がある。これは言語要素が唯識體系の中に導入せられた一例であろう。唯識派の論師は言語表現に注目し、それを唯識教説の中に導入している。なお、名句文は不相應行法であり、先の文獻には不相應行法としての觀點から名句文に言及する説述もある。しかし今はこの點についてはふれずにおく。

こうした言語説に關する關心をシナ佛敎の論書の中に尋ねると、慈恩以前のものの中にはほとんど見出し難い。わずかに、大乘義章に、名句字(文)に關する關説がある程度のものである。慈恩に至つて始めて言語論に意識が向けらるるに至つたようである。これは結局、玄奘の新譯佛敎の新しい局面であるに他ならない。慈恩は玄奘によつて將來せられた言語論的所説をシナ佛敎の重要な論題であつた體論の場を受容し獨自の教體論を形成した。換言すれば、從來のシナ佛敎學の傳統的態度を踏襲しつつ新しい局面を展開しているといえよう。